



未来社会構築のための教育

—チャリティ文化、教科の見方・考え方、子ども理解—

季刊誌 第5号

—2022年春号—

一般社団法人

子ども未来・スポーツ社会文化研究所



はじめに

未来社会構築のための教育 －チャリティ文化、教科の見方・考え方、子ども理解－

子ども未来・スポーツ社会文化研究所「季刊誌第5号：2022年春号」をお届けします。

コロナ禍で、不安や期待を伴って、未来社会に思いを馳せることが日常化しました。同時に、そのための教育は、如何にあるべきかという議論も活発化してきました。ひとつの未来社会の在り方としては、これまでの成長社会における交換経済から成熟社会における贈与経済へ転換を図るために、チャリティ文化による心豊かな社会の構築が考えられます。また、近代社会を支えてきた体育という教育は、その見方・考え方によって大きく変わろうとしています。さらに、子ども理解をめぐって、子どもあるいは保護者に寄り添った教育の在り方が求められています。そこで、下記の通り、第13回から第15回のセミナーを通して、未来社会構築のための教育について考えてみました。

第13回セミナーでは、大阪マラソンに第1回から調査研究で関わってこられた杉本厚夫氏（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）に「チャリティ文化が未来社会を創る－大阪マラソンの挑戦－」をテーマとして、大阪のチャリティ文化を背景に、その再生を標榜する大阪マラソンの挑戦が、市民意識を醸成し、未来社会を創っていく可能性について述べてもらいました。そして、新聞社で市民マラソンの企画に携わってこられた速水徹氏（主席研究員・元朝日新聞論説委員）に、チャリティ文化の現代社会における意味についてコメントをいただきました。

第14回セミナーでは、30年間にわたって、学習指導要領の作成に関わってこられた菊幸一氏（会員・筑波大学教授／日本体育・スポーツ・健康学会会長）に「これからの中等教育における体育の在り方－『教科の見方・考え方』等の出現が意味するものから－」について、今回の学習指導要領で新たに設定された「教科の見方・考え方」の背景や意味、あるいはアクティブラーニング（主体的・対話的で深い学び）のとらえ方やカリキュラム・マネジメントの意味を含めて、これからの体育の在り方について話してもらいました。そして、「できる」との意味について、身体論から再考し、これからの体育の在り方について、杉本厚夫氏（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）にコメントをいただきました。

第15回セミナーでは、元小学校教諭で、作文を通して子どもたちの心の声を聴く作文教育をされてきた土佐いく子氏（会員・和歌山大学非常勤講師）に「子どもを本当に理解していますか？－子どもに寄り添う教育－」をテーマとして、子どもの言動に寄り添いながら、如何に子どもを理解しようとするのかを、具体的な事例をもとに語ってもらいました。そして、子どもとのキャンプや遊びの実践から、子どもの発言を受け入れ、ともに考えることが寄り添う教育ではないかという提言を、杉本厚夫氏（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）からいただきました。

ご一読いただき、皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

<目次>

●第13回セミナー・・・P.3~

日時：2022年1月21日（金）20時～21時30分

ナビゲーター：杉本厚夫（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）

コメンテーター：速水 徹（主席研究員・元朝日新聞論説委員）

ファシリテーター：谷口輝世子（主席研究員・米国在住スポーツライター）

テーマ：チャリティ文化が未来社会を創る－大阪マラソンの挑戦－

大阪の中之島にある中央公会堂、大阪城、淀屋橋をはじめとする多くの橋は、大阪市民のチャリティによるものということはご存知ですか？このような大阪のチャリティ文化を背景として、大阪マラソンはチャリティマラソンに挑戦してきました。では、チャリティ文化は、われわれの生活をどのように変えるのでしょうか。コロナ禍の今、チャリティ文化の意味について、大阪マラソンの9年間にわたる研究から報告します。

●第14回セミナー・・・P.15~

日時：2022年2月26日（土）20時～21時30分

ナビゲーター：菊 幸一（会員・筑波大学教授／日本体育・スポーツ・健康学会会長）

コメンテーター：杉本厚夫（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）

ファシリテーター：速水 徹（主席研究員・元朝日新聞論説委員）

テーマ：これからの教育における体育の在り方

—「教科の見方・考え方」等の出現が意味するものから—

本セミナーでは指導要領上における教科体育の「これまで」を振り返りながら「これから」何がめざされようとしているのか（めざさざるを得なくなっているのか）について解説し、そこでは何が課題となっているのかに関する話題を提供してみたい。特に、今回の指導要領作成のプロセスで出てきた「教科の見方・考え方」の背景や意味、あるいはアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）のとらえ方やカリキュラム・マネジメントの含意するところから、課外活動として位置づけられる運動部活動の在り方も含めて、これからの体育の在り方を考えてみたい。

●第15回セミナー・・・P.27~

日時：2022年3月11日（金）20時～21時30分

ナビゲーター：土佐いく子（会員・和歌山大学非常勤講師）

コメンテーター：杉本厚夫（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）

テーマ：子どもを本当に理解していますか？－子どもに寄り添う教育－

コロナ禍で、青年・子どもたちも悲鳴をあげながら懸命に生きています。その心の声を聞き取り、共感してくれる人を今ほど求めていた時はありません。心の声がなぜ、聞き取りにくくなったのか、どうしたら聴けるのか、今日の子ども理解について、現場から話をします。

《第13回セミナー》

チャリティ文化が未来社会を創る

－大阪マラソンの挑戦－

杉本厚夫（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）

はじめに

ここに2本の水のペットボトルがあります。水の質はまったく同じなのですが、一方は100円で、一方は80円です。皆さんはどうちらを買いますか？こう問われると、ほとんどの人が80円の方と答えます。では、こう訊かれたらどうでしょう。80円の水は、大手企業が大量生産によってつくったものです。100円の水の方は、自然災害にあった企業が何とか再建し製造したのですが、どうしても100円がギリギリの値段なのです。さて、皆さんはどうちらを買いますか？このようにその値段の背景を聞くと、多くの人が高い100円の方を買うと答えます。つまり、20円はその企業に対する寄付なのです。

80円の水を選ぶのは、安くて得をするという自己の利益を最大にする「利己主義」の立場に立った成長の時代の「交換経済」の考え方です。一方、100円の水を選ぶときは、相手を支援する「利他主義」の立場に立った成熟の時代の「贈与経済」の考え方と言えます。

この贈与経済による活動はすでに始まっています。

1. チャリティ文化が都市を創造する

それは、2011年の東日本大震災と津波による自然災害に対して、3000億円にも及ぶ寄付が集まり、チャリティ（寄付）元年とまで呼ばれたように、チャリティ文化が復活したのです。京都アニメーションの放火事件では、1か月に20億円の寄付がありました。

Jリーグ「ガンバ大阪」のホームスタジアムである市立吹田サッカースタジアム（パナソニック・スタジアム）は、日本で初めて企業とファンによる寄付金によって建てられたものです。これを企画した桑原志郎氏（当時、大阪府サッカー協会常務理事）は、寄付によってガンバファンを増やしたかったからとその目的を語っています。また、戦時の日常世界を描いたアニメーション映画「この世界の片隅に」は、クラウドファンディング（インターネットによる寄付）でパイロット版資金調達に成功し、大ヒットしました。プロデューサーの真木太郎氏は、映画のサポーターを作りたかったと述べています。さらに、このクラウドファンディングの老舗READYFOR株式会社代表取締役の米良はるか氏は、会社の設立趣旨について、寄付する人と寄付を受ける人との新たなコミュニティを作りたかったからと言います（関西大学創立130周年記念シンポジウム「成熟社会の奨学金の役割」より）。つまり

り、支援によって新たなコミュニティを形成する社会が出現したと言えます。このように、チャリティという行為は、人と人を繋ぎ、心豊かな社会を創っていくと言えそうです。

ちなみに、チャリティ文化が根付いているイギリスでは、初めは宗教的、あるいは倫理的な意味合いでチャリティは捉えられていましたが、近代に入って、チャリティは相互扶助の心豊かなコミュニティ形成のためにあったと言われています。

実は、大阪という都市は、このチャリティ文化で創造されていたのです。

都市研究者の橋爪紳也氏によれば、「大阪には、城下町として発展した近世から、多くの市民が公益に資することを是とする美德がありました。他者のためにも、みずから努力する気風は、商いの街で仕事をする人たちの誇りの源泉でもあります。」と言います。

大阪は八百八橋と言われるほど橋が多いのですが、そのほとんどが、民のチャリティによってかけられました。だから、太左衛門橋、末吉橋、淀屋橋、佐野屋橋といった町橋と呼ばれる橋は、寄付した人の名前や屋号がつけられているのです。

また、公共施設としての大坂府立中之島図書館、大阪市立美術館、大阪市中央公会堂も民の寄付によるものです。

さらに、御堂筋の拡幅整備は、そのことによって利益を得るいわゆる受益者負担によって行われましたし、大阪城の天守閣復興は市民の寄付によるものです。通天閣は、地域住民が会社を設立して復興させました。

相撲の「たにまち」(パトロン)の語源は、大阪の谷町の医者が無料で若い力士の面倒をみたことからきていると言われています。

このようなチャリティ文化を背景として、チャリティマラソンとしての大坂マラソンが誕生しました。それは、チャリティ文化による未来の心豊かな成熟社会を創っていくモデルを示すことにあると考えています。

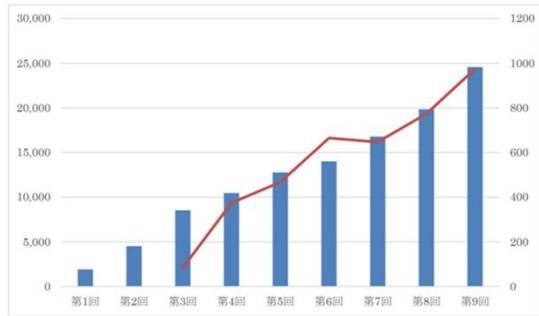
そこで、大阪マラソン組織委員会からの依頼を受けて、私たちがここ9年にわたって関わってきた読売新聞社と関西大学の共同調査研究から、チャリティのために走るランナー(する)と、観客(見る)とボランティア(支える)の活動を、見返りを求めない贈与(チャリティ)と捉え、それらを分析することから、チャリティマラソンとしての大坂マラソンを読み解いてみたいと思います。その上で、チャリティ文化による未来社会を描いていこうと考えています。

2. ランナーとチャリティ

参加ランナーは、大阪マラソンのチャリティへの賛同の意思表示として、チャリティ団体(寄付先団体)を決めて、二口以上(1000円以上)の寄付をすることが求められます。そのチャリティ団体を7つのテーマ(グループ)に分けて、ランナーに選んでもらいいます。これは、大阪マラソンのチャリティマラソンとしての特徴です。

また、各チャリティ団体への寄付金（7万円以上）を集めるチャリティランナーという制度があります。さらに、チャリティグッズを販売する、募金するということもしています。

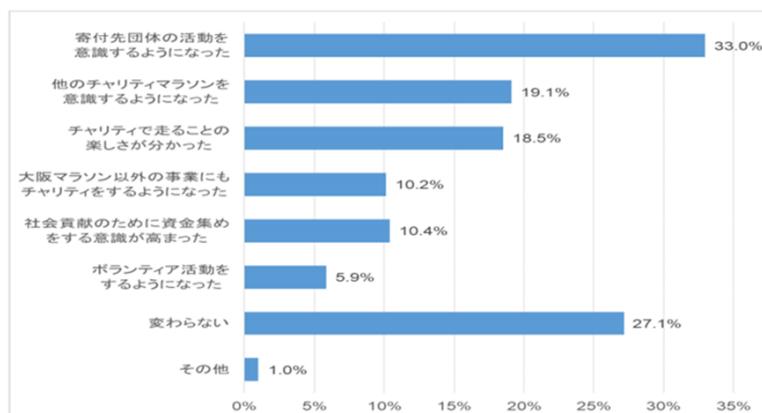
その結果、チャリティ額は年々増加して、2億4千万円近く集めることができました（ちなみに、ロンドンマラソンは90億円以上集めます）。



1) 一般ランナーのチャリティ意識

では、ランナーとチャリティについて見ていきましょう。

一般ランナー全員が寄付することについて、どのような意識の変化があったのかについて調査してみました。【一般ランナーのチャリティによる意識と活動の変化（第9回大会）】



「寄付先団体の活動を意識するようになった」が33.0%（海外：34.8%）で、自分が寄付した団体への関心が高まりました。

「他のチャリティマラソンを意識するようになった」が19.1%（海外：25.5%）で、大阪マラソン以外のチャリティマラソンが気になるようになりました。

「チャリティで走ることの楽しさが分かった」が18.5%（海外：30.9%）と、チャリティマラソンの意義を感じています。

「社会貢献のために資金集めをする意識が高まった」が10.4%（海外：18.2%）と、チャリティに対する意識の変化がみられました。

「変わらなかった」は27.1%（海外：21.0%）でした。

このように、大阪マラソンに参加することで、チャリティに対する意識が高まり、普段の生活でのチャリティ活動につながる可能性が示唆されました。

次にチャリティランナーについて見てきます。

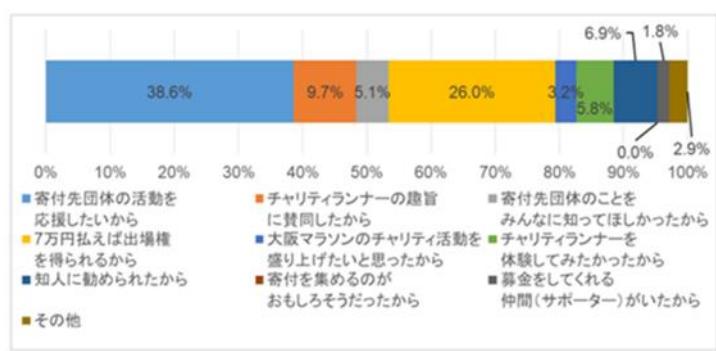
2) チャリティランナーの意識（参加動機）と課題

大阪マラソンにおけるチャリティランナーとは、組織委員会の公募により選定された社会活動を行う寄付先団体から、支援したい団体を選んで、インターネット上の専用サイトで広く協力者（サポーター）を募り、目標額（7万円以上）の寄付額を集めて（チャレンジ）、

出場権を得るランナーのことです。

その応募動機を訊いてみました。【チャリティランナーの参加動機（第9回大会）】

「寄付先団体の活動を応援したいから」が38.6%、「7万円払えば出場権が得られるから」が26.0%、「寄付先団体のことをみんなに知って欲しいから」が5.1%でした。



このように、チャリティランナーにはチャリティ団体のメッセンジャーとしての意識が欠如していることがわかりました。

この「7万円払えば出場権が得られるから」という意識に対して、チャリティランナー

から次のような意見も聞かれました。

- チャリティランナーの位置づけを「7万円払って出走権を得た人たち」と言われることが悲しい感じがしました。マスコミでもそういわれていましたし、「そこまでして（7万円も払って）マラソンでたいの？」と言われることもあり、主旨が違うことをどう伝えたらいいか正直悩みました。

チャリティというのは単にお金を寄付するということだけではなく、募金活動を通して寄付先団体の活動の情報を伝え、賛同を得ることが、メッセンジャーとしてのチャリティランナーの主たる目的であると言っても良いでしょう。その意味では、1人の人が7万円を出すよりも、70人の人が1000円ずつ出した方が価値があるということになります。

では、ロンドンマラソンのチャリティランナーはどうでしょうか。

チャリティランナーは、自分が走る理由（#Reason To Run）を表明します。例えば、自分の子どもをがんで亡くしたので、がん撲滅団体のチャリティを集めるために走ります。また、ランナーは「なぜ、このチャリティ団体を支援するために走るのか」という質問に対して、自分の体験を交えて、しっかりと支援するチャリティ団体の活動の趣旨について答えます。さらに、チャリティ団体も仮装をして観客に自分たちの活動を分かりやすくアピールします。

このように、チャリティ団体の活動をアピールするために走るということがランナーの中で明確に認識されているのが、ロンドンマラソンはチャリティマラソンだと言われる所以です。

3. ボランティアというチャリティ

次に、ボランティアについて見てきましょう

そもそもスポーツボランティアの特徴は何でしょうか。

ボランティアというと1995年の阪神淡路大震災からその言葉が一般的に認識され、2011

年の東日本大震災までの「災害ボランティア」を思い浮かべる人は多いのではないでしょうか。あるいは、日常的には障がい者のための「福祉ボランティア」が活躍しています。しかし、最近は「スポーツボランティア」をする人が多くなってきました。「災害ボランティア」は被害を受けたこと、「福祉ボランティア」では支援が必要なことに対して、ある面、その「苦しさ」をまず共有しなければなりません。そして、そのボランティア活動に対しては「感謝」されるのです。

一方、大阪マラソンのような市民マラソンでは、ランナーは好きで、しかも楽しんで走っているわけですから、スポーツボランティアは、その「楽しさ」を共有することから始まります。そして、例えば、給水ボランティアといってランナーに飲み物を渡すという活動では、もちろん、ランナーからはありがとうと言って感謝されますが、それ以上に走っている姿に「感動」すると言います。ボランティア調査では「すべてに感動した」、「なぜか涙が止まりませんでした」、「逆にパワーをもらいました」などの感動した言葉が多く見られます。つまり、「感謝から感動へ」がスポーツボランティアの特徴であると言えます。

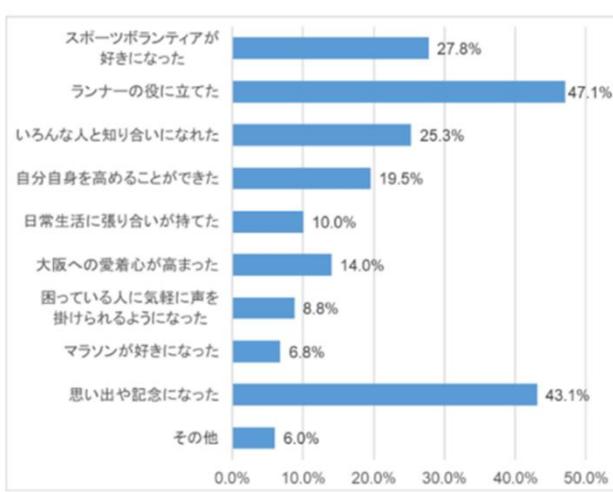
1) 大阪マラソンのボランティアの公益性と自己実現

ボランティアは、無償性、自発性、公益性が要件だと言われます。

この公益性について、「ボランティアでは、個人の自己実現の物語より、公共の物語をいかに描くことができるか」という事が重要である（仁平典宏『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版会、2011年）と言われます。今回の東京2020オリンピックでは、この公益性が問題となりました。

では、大阪マラソンのボランティアの公益性と自己実現はどうでしょうか。

大阪マラソンのボランティアを経験したことによる意識の変化を訊いてみました。【大阪マラソンのボランティアを経験したことによる意識の変化（複数回答）（第9回大会）】



「ランナーの役に立てた」が47.1%で公益性の高いものとなっています。

「思い出や記念になった」が43.1%で、自己実現が達成されたことがうかがえます。

「スポーツボランティアが好きになった」が27.8%とボランティア活動への積極性が培われました。

「大阪への愛着心が高まつた」が14.0%で地域愛が高まつたと言えます。

このように、公益性を担保しながら、

自己実現にも貢献していると言えます。さらに、地域愛が高まるところにも特徴があると言えます。

2) 大阪マラソン名物「まいどエイド」と「力持ちボランティア」の公益性

この写真は、32キロ付近に設置されている大阪市商店会連盟がランナーに給食する「まいどエイド」というボランティア活動で、関西大学の学生が食べ物を渡しているところです。ランナーはここでの給食を楽しみにしており、ボランティアの人も盛り上げるために、ラップ調で応援の言葉をかけながら食べ物を渡したり、食べやすいように一口大にしたりして、心を込めて手渡します。



この「まいどエイド」は、大阪マラソンの一つの名物になっていますが、大阪の商店街のアピールのためだけではなく、このエイド（給食）を楽しみしているランナーのためのボランティアとして、非常に公益性が高いと考えられます。

もう一つ、大阪マラソン名物の力持ちボランティアについて紹介します。



マラソンのため、普段の道路を自転車やバギーで横断できないので、市民の方は歩道橋や地下道で渡らなければなりません。それらを市民の方にかわって運ぶボランティアを力持ちボランティアと言います。

この力持ちボランティアに対して、「歩道橋を渡らなければいけない一般の方の自転車を、ボランティアの方々が一台ずつ持つて運んでくださっているのをみて申し訳なくて泣きそうになりました。一般の方々も文句も言わず並んでその順番を待つて下さっていました。そんなみなさんのお陰で走らせてもらっているのだと痛感し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。」(40代：女性)という感想が寄せられました。

力持ちボランティアへの思いだけではなく、沿道の住民にまで思いをはせるランナーに、大阪マラソンのボランティア活動の神髄があるように思えます。

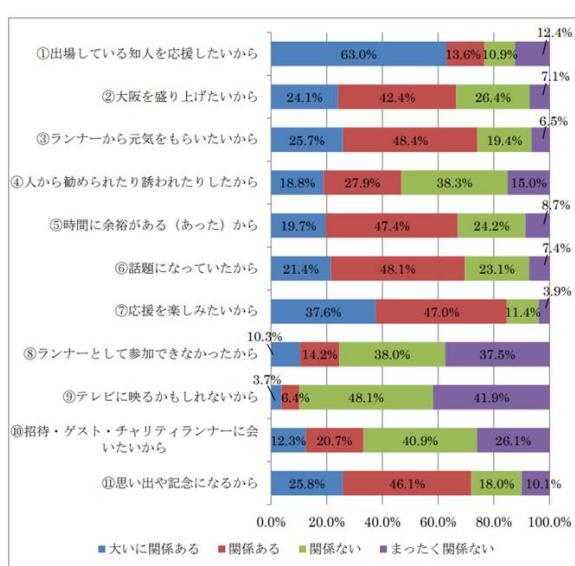
4. 観客というチャリティ

次に、観客について見てみましょう。

1) 観客の応援理由

観客が応援する理由について訊いてみました。【大阪マラソンの観戦（応援）の理由（第3回大会）】

「応援を楽しみたいから」が84.6%で最も多く、ある程度、応援を楽しむ文化が大阪には根付いていると言えます。



「出場している知人を応援したいから」は 76.6% で、「大いに関係がある」だけでは 63.0% で最も多く、家族や知人を応援するのを楽しむというのが一般的な傾向と言えるでしょう。

「ランナーから元気をもらいたいから」は 74.1% であり、ボランティアと同じように観客もランナーから元気をもらいたいと思っています。

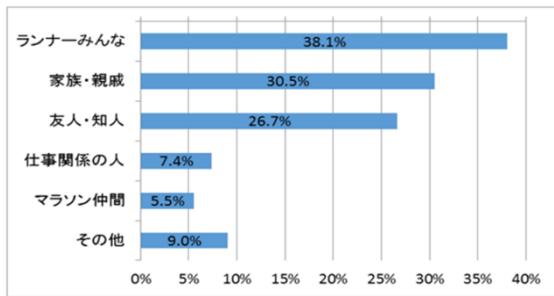
「大阪を盛り上げたい」は 66.5% の人が理由としてあげており、地域の祭りとして定着しつつあることがうかがえます。

ここにも応援を楽しみたいという自己

実現と、大阪を盛り上げたいという公益性が見え隠れします。

2) みんなを応援する観客

誰を応援するのかを訊いてみました。【応援の対象（第6回大会）】



特定のランナーを応援するだけではなく、見ず知らずの人にも声援を送ります。そのとき、現代の匿名性社会はその姿を変え、知り合いかどうかということの意味すら霧散させてしまうのです。この沿道から見ず知らずの人に声をかけるという現代の都市社会では考えられない行動が、この

大阪マラソンではごく自然に行われるのです。

では、そんな応援することで何か変わったかことはあるでしょうか。

ある主婦の話です。何気なく大阪マラソンを見に来た主婦が、周りの雰囲気に誘われて、知らぬ間に声を出してランナーを応援していました。その時、ふと思ったのです。「普段の生活で、こんな知らない人に声をかけることがあるやろか?」「ないなあ!」。その次の日から、近所の知らない人にも気軽に声をかけられるようになり、地域の人間関係が広がっていましたと言います。このように応援することによって、普段の生活を変える力が大阪マラソンにはあるのです。

3) 観客の応援メッセージ

観客の応援に大阪らしいユーモアがにじんでいます。

- 「足が痛い、そんなの気のせいや」

- ・ 「ゴールの後には冷たいビールが待っている」
- ・ 「ここまで頑張ったあんたはえらい！」
- ・ 「しんどいんか？代わったろか」
- ・ 「ゴールがあなたを待っている。ゴールは逃げへんでえー」

応援で「がんばれ」というと緊張してしまうのですが、このようにクスッと笑うことによって、リラックスでき、完走できるのです。とても理にかなった思いやりです。ちなみに海外では、「リラックス」や「Take it easy」と声をかけるようです。

また、「ランナー盛上げ隊」が応援のパフォーマンスをします。

「観客」というと一般的に「Seeing（観る）」側と考えられがちですが、今や「観客」は応援というパフォーマンスを「する（Doing）」側に変わってきていると言えます。

つまり、パフォーマンスをすることで、大阪マラソンに参画するのです。

応援という意味では、協賛企業も地域貢献というチャリティをします。

大阪マラソン第3回大会から協賛企業である株式会社アドバンスクリエイトにその理由を聞いたところ、「大阪マラソンの協賛企業になる大きな理由は、自社の広告ということよりも、大阪という地域への社会貢献です。」という答えが返ってきました。その意味では、「スポンサーシップ」というよりは「パートナーシップ」という考え方で、大阪マラソンに参画されています。これは欧米での協賛企業の在り方です。かつて楽天が、スペインのプロサッカーチームの「FC バルセロナ」とパートナーシップを結んだのは、バルセロナ市と神戸市への地域貢献のためでした。

5. チャリティ文化が未来社会を創る

1) ロンドンマラソンのチャリティ物語【BBCニュース】



BBC ニュースより

2017年のロンドンマラソンでの出来事です。マシュー・リース（Matthew Rees）氏は最終コーナーを回って来て、足を痛めて苦しんでいるランナーデビット・ワイエス（David Wyeth）氏を見つけました。彼は起きようとするが、地面に倒れてしまいます。リース氏はワイエス氏のところに行って、「がんばろう、絶対ゴールできるよ」と励ました。

しかし、彼が走ろうとする様子を見ていると、もう一人で走るのは無理だと気づいたのです。そこで、リース氏は自身の走りを止めて、ボランティアといっしょに、仲間のランナーを助けてゴールまで一緒に歩きました。

このような行動について、リース氏は、「誰でも同じことをするだろう」と述べ、「ただ困っている人を助けただけです。彼がゴールできて、大丈夫だったら、それでとても嬉しい」と彼は付け加えました。レースの関係者は「これこそ、ロンドンマラソンの真髄だ！」とツ

イートしました。

「困っている人を助けただけだ」と言い切ったリース氏に、日常生活で忘れかけていたチャリティ文化（人のための無償の活動）の大切さを思い起こすのです。

2) チャリティマラソンが変える都市生活

大阪マラソンでも、このようなチャリティ物語は生まれています。

◆コミュニケーションについて

夫はどちらかと言えばコミュニケーションが苦手です。ご近所の人達にも目を合わせて挨拶することさえできません。そんな夫が見知らぬ沿道の方々から「けんちゃん、がんばれ！ナイスラン」「しんどいのん、気のせい！」と応援して頂き、沿道の方々とハイタッチをしておりました。それも笑顔で！夫の中で何かが溶解した瞬間でした。大阪マラソン後、夫は人間不信感が和らぎ、オープンマインド（大阪人なので、おおきに、まいど）で人との会話も楽しめています。（50代：女性）

◆人を支えることについて

ボランティアや沿道の皆さんに支えられて走れていると実感しています。私も勇気、元気を分けてあげられたらと思いボランティアや応援を実行する様になりました。今回も走りながらも声をかけたり、走り終わってからは、足がつっている方の手助けをしたりと実行する事ができました。普段の生活の中でも、もっと色々な事をして行けたらと思います。（50代：女性）

◆地域について

ボランティアや沿道の応援について、感謝しかありません。ありがとうございました。私も積極的に地元の活動などに、参加してみようかと思いました。（50代：男性）

以上のように、ランナーとボランティアと観客の相互作用が、チャリティ文化を背景として、心豊かな未来社会を創っていくことを大阪マラソンにみることができると言いたいと思います。これからも大阪マラソンはチャリティマラソンとして都市の創造に挑戦する市民マラソンであることを切に願っています。

<参考文献>

橋爪紳也・杉本厚夫著『大阪マラソンの挑戦－市民スポーツ／チャリティ文化／都市創造－』創文企画、2022年

<速水 徹（主席研究員・元朝日新聞論説委員）のコメント>

大阪という街は元来、多くの市民が公益に資することを是とする美德があったということ、そして、その精神を大阪マラソンに具現化し、チャリティの概念をスタート当初から組み込まれた、というのは、まさに慧眼であったと感じました。

私自身、大阪を発祥の地とする新聞社に長く勤め、昨年5月末で退社しましたが、中之島の会社の近くには中之島図書館があり、仕事の関係で足しげく通った場所がありました。

また、これも会社から近い中央公会堂は、2015年に高校野球100年を記念したシンposiumを開いたり、3年後の2018年にも、今度は大会の100回記念の節目で感謝祭を企画したりして、いずれも会場とさせていただいた思い出深い場所です。

中央公会堂など、大阪市民になじみの深い、歴史的な施設が寄付をもとに建てられたこと、そして、何気なく通ってきた御堂筋や、八百八橋と呼ばれる大阪の橋の多くが、市民が資金を負担する「町橋」であったという歴史的背景を踏まえると、まさに大阪という街にチャリティの文化が遺伝子として脈々と引き継がれてきて、今を生きる我々は、そうした恩恵を被っている、ということが言えるかと思います。

実際、私自身もさきほどお話したように、中央公会堂や中之島図書館という極めて歴史的な建造物を活用させていただいて、様々な仕事をしたり、学びの場とさせていただいたりしてきたわけです。ある意味、時間を超えて、100年以上前を生きた人々のチャリティの恩恵を受けている、という見方もできるかと思います。

思えば、中央公会堂は竣工が1918年（大正7年）で、さきほどお話した、高校野球100回大会記念の感謝祭を開かせていただいたタイミングが、公会堂の竣工からちょうど100年の節目だった、というのは奇跡的な一致だったとも感じます。

中央公会堂が100年前に竣工した時点では、100年後の2018年という未来に、国の指定重要文化財となっていて、「中央公会堂は大阪の知と文化と歴史のシンボル」と公式ホームページで紹介もされ、例えば高校野球100回記念の感謝祭が開かれている、といったことは当時の人々は想像さえしなかったわけですが、我々が今生きている現代社会は当時の人々からすれば未来であるわけで、これこそまさに、杉本先生の本日のお話のタイトルである「チャリティ文化が未来社会を創る」ということではないかと思うのです。

大阪はこうしたチャリティの精神、利他の精神が發揮されてきた街である、という歴史を踏まえながら、大阪マラソンにチャリティの発想を大きな柱として組み込み、このイベントへの参加が、ただ単に42.195キロを走るという自己目的的な、個人的な行為にとどまらず、それが利他の精神につながっていく、あるいは社会やさまざまな文化を支えていくことができるんだ、ということを感じられる、体感できるというのは、ひとつのスポーツイベントに付与されたポリシーとしては非常に意味があることで、素晴らしいコアを有したイベントのありようであろうと思います。

「走ることが、誰かのためになる」という公式ホームページの言葉が、これを象徴しているのだと思います。

この大阪マラソンが始まった2011年、東日本大震災が起き、全国からボランティアが集まりましたが、ボランティア元年と呼ばれた阪神淡路大震災発生の1995年以降、チャリティやボランティアという利他的な行為があらためて強く意識されることとなった年に大阪マラソンがスタートした、というのも、非常に示唆的であると思います。第1回大阪マラソ

ンの大会開催へ向けてチャリティプログラムを煮詰めておられるさなかに東日本大震災が起き、被災地復興支援というプログラムも組み込まれたのも、ごく自然の流れであったと思います。

このチャリティマラソンという考え方は、このマラソンの真ん中を貫く背骨といいますか、屋台骨であるわけですから、今後も不変のものとして掲げ続けていただきたいと思います。さきほどの中会堂のお話ではないですが、チャリティ文化を広め、100年先の我々が見ることのない未来社会にも資する大会を目指す、というくらいの、ロングスパンの視点も持って運営していただきたいと思っています。

一方で、今回のご発表でも、また著書『大阪マラソンの挑戦』でも触れられていますが、団体への寄付金を7万円以上集めることで参加資格を得るチャリティランナーが「7万円を払って出走権を得た人たち」と思われてしまっている現状がある点がやはり、気になりました。

市民マラソン自体が過熱状態にあり、中でも大都市マラソンを走りたいという希望を持つランナーが多いことから、極端な話、チャリティ精神は全くないが、しかし、7万円払ってでも出たい、という人もおそらくおられるわけで、そうなってしまう現状、あるいは、大阪マラソンがチャリティを根幹に置いてきていたながら、その精神が十分、一般の方々に伝わっていないという課題をどうしていくのか、ということは、大阪マラソンの精神に関わる問題ですから、今後の非常に重要な課題になるかと思います。

大阪マラソンがひとつの理想としているロンドンマラソンについてですが、このロンドンマラソンにはチャリティの意識が非常に強く根付いていて、寄付額がほぼ100億円に達するというのは、本当にすごいことだと思います。単一の年次募金イベントとしては世界最大で、ギネス記録になっているというのは、ロンドン市民、そしてこのイベントに参加してくるロンドン内外、さらには世界中の人々が、ロンドンマラソンをチャリティ精神の受け皿として広く認識しているということの証明であるわけで、まさに世界的にも屈指のチャリティスポーツイベントであろうかと思います。

大阪マラソンは、このロンドンマラソンをモデルとして、チャリティマラソンである、ということを売りにして来ておられ、これからもしていかれるわけですが、少し引いた視点で見ると、大阪マラソンが唯一無二の特徴を持った市民マラソンとして広く定着していく、ということだけでなく、むしろ、チャリティ精神を備えた市民マラソンが日本中にもっともっと増えていくことを下支えもしていく、という発想こそが、節目となる第10回大会以降に必要なのではないかとも感じました。

いま、全国に数多くの市民マラソンはそれぞれの特徴を備えて人気を競い合っていますが、その中で大阪がチャリティマラソンという個性を軸にしながら、ランナーの間でさらなる人気を得る大会にしたい、という発想より、この大阪マラソンが大切にしてきたチャリティ文化を他のマラソンにも広げていく、という発想です。

まさに、杉本先生の冒頭のパワポ資料にありましたように、自己の利益を最大にする利己

主義的、大阪マラソンの発展のみを考えていく発想ではなく、他者を支援する利他主義を指向する、市民マラソン全体の発展へつなげていく、という発想です。

ロンドンや大阪のようなチャリティ精神を根幹に置いた市民マラソンが他にももっと増えしてくれれば、それはマラソンというイベントに参加することを通じて、利他の精神を体感し、体現し、また拡散していくことになります。

さらに言えば、同様のチャリティ精神を大きな柱に置いたイベント運営の考え方を他のスポーツにも広げるという発想もあるかと思います。そうしたマクロ的な視点も、近未来を見据えた「大阪マラソンの挑戦」のひとつに入れていく、という視座もあってよいのではないかと思いました。

《第14回セミナー》

これからの教育における体育の在り方

—「教科の見方・考え方」等の出現が意味するものから—

菊 幸一（会員：筑波大学教授）

はじめに

今回の学習指導要領で、前回の学習指導要領とは違う目標の構造というものが出てきました。これまでの小学校体育の目標は「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」（※下線部は筆者による。以下、同様）と書かれています。中学校や高校も同じようなしつらえだったわけですが、「適切な」とか「基礎」とかは、特に小学校で強調されていることです。

これに対して、今回の指導要領（2017年）は、非常に大きく仕組みが変わっています。最初に「体育や保健の見方・考え方を働かせ」という言葉が出てきていて「課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次の通り育成することを目指す」というものです。

特に、体育や保健の見方・考え方を働かせるということは、新しい文言です。体育や保健の見方・考え方とは、いったい何なのでしょうか。その後の文章は、それほど変わっていないのですけれども、最後の「資質・能力」という言葉が、次の（1）から（3）の内容になります。

（1）は「その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする」です。これは、小学校ですので、動きや技能ということになっています。中学校・高校では、これに知識というものが入って、「知識・技能」というような捉え方をするのですけども、小学校では動きや技能という表現になります。これは、わりと従来の捉え方を踏襲しています。

（2）は「運動や健康について自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う」。これまでも「思考・判断」というのがあり、これらと知識とが結び付られて考えられていた部分があったのですが、今回は他者に伝える力、要するに表現する力のことですが、こういったことが新しく入ってきているというのが特徴です。

（3）「生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、明る

く豊かな生活を営む態度を養う」。これはずっと体育では言われている内容なのですけれども、他の教科ではなかなか難しいということのようなのですが、資質・能力としては、学びに向かう力であるとか、人間性であるとか、そういうワードでくくられているものです。

要するに、この3つの資質・能力というものを、目標分けして書き込んだというのが、今回の指導要領の表面的な変化です。しかし、その背後にある考え方を探ると、後ほど述べるように、教科に対する非常に大きな変化を伴った意味合いを持っているということになります。

では具体的に、要領解説の中で、体育の見方・考え方と保健の見方・考え方とは、どのように書かれてあるのか。これは共通の文脈構成で並列的に書かれており、体育の見方というのは生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさ喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」(p.18)

その次は、保健の見方・考え方です。疾病や傷害を防止するとともに、生活の質や生きがいを重視した健康に関する観点を踏まえ「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境作りと関連付けること」(p.18)と書いてあるのです。

ただ、これらは非常に難解な文章で、書いた人もおそらく理解するのは難しいのではないかと思うのです。どうしてかということ、これを教科の中（枠内）の問題として理解すると非常に難解であるし、限界があるからです。

なぜ、こういう教科の見方・考え方というものが必要なのか。その背景には、教科として成立するということを外に向かってちゃんと示さないといけなくなった、ということがあります。つまり、外から見て学校の教育の中になぜ、教科としての国語、算数、理科、社会、…というのは必要なのかという根本的なところを説明しないといけなくなった。ということは、教科はあって当たり前ということの基盤が揺らいでいるということなのです。

中学・高校は教科「保健体育」という形で成立しています。小学校は体育と保健とが切り分けられているのですが、中学・高校では「保健体育」という一つのまとまった教科としての見方・考え方として示さないと、早晚、この教科「保健体育」は瓦解します。非常に厳しい言い方をするようですが、体育の見方・考え方、保健の見方・考え方というのを分けてしか示せないような教科であれば、例えば保健については他の教科と一緒にになってやればよろしいのではないかという見方も出てくるということなのです。その辺のことを中学・高校の先生たちは、あまり理解していないという印象を私は持っています。このような状況を、一旦プロローグとしてお話しておきたいと思います。

1. 「見方・考え方」の審議過程と背景

では、見方・考え方というのがどういうふうに出てきたのか。実際、私は調査協力者として部会に参加していましたので、その経過というのはある程度、理解しています。そこでは、

まさかほど言った3つの資質・能力にわけて、保健体育として、どういう内容を構成していくのかということを議論していたわけです。その前提になったのが、2007年の学校教育法の改正による「学力」の定義というものです。

ここでいう学力とは、①基礎的な知識および技能の習得。②知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を養うこと。これは活用というものです。③主体的に学習に取り組む態度ということで、これは探究というものに紐づけられる。いわゆるこの習得、活用、探究に力点を置くという下敷きが前回の指導要領からすでに出ていたわけです。

ですから、とにかく知識を身につければいいのだというシステムから、それだけではなくて習得したものをいかに活用して探求に結びつけていくのかという学びの非常に深いところにまで立ち入って、教育というのは学力を保障していかないといけないのだと言われていたわけです。つまり、知識ではなくて、学力を資質・能力の体系のそれに変えていくのです。そのなかで学習というものを成立させていく。それを引き受ける教科というものがあるのだという考え方だったのです。

これに沿って、我々もずっと考えて、先ほど示した3つの資質・能力論に沿った具体的な内容を考えていたわけですけれども、突然、教科別部会を、10ヶ月ほど審議中断してくださいとなってしまったのです。それは、いわゆる親部会としての教育課程企画特別部会というのがあり、ここで、いろいろな内容についてさらに審議をしているから、その審議をした内容を踏まえて再度考えてほしいということだったからです。

それが、先ほど申し上げました3つの改善の方向性として、具体的に出てきたわけなのです。我々は①学習指導要領の枠組みの見直し、つまり3つの資質・能力の枠組みしか考えていなかったのです。それに対して、②のカリキュラム・マネジメントの実現ということと、③の主体的・対話的で深い学びを考えるようにと言われました。③は、最初はアクティブラーニングということで出てきたのですが、主体的・対話的で深い学びという表現に変わって出てきました。

したがって、3つの改善の方向性が出てくる背景にどういう理念があるのか、改善の方向性として何を考えないといけないのかということが、新たな課題として出てきたのです。21世紀に入ってから、いろいろ言っていたことをまとめたということなのですけれども、より強く社会に開かれた教育課程ということを言い始めたのです。

これは、学齢期完成追求型の学習に基づく学力ではないということを意味します。要するに学校を卒業した後も、それが生きて働くといけないのだという強調です。その背景には、21世紀社会というものが産業社会から知識基盤社会へ、あるいは成熟型社会や循環共生型社会になるということと、もう一つ大きいのはAI時代の到来です。AIというものが出現して、知識・技能として身につけたものをAIが肩代わりしてくれる時代が来るのだと。では、いったい、現在の子どもたちに何を身に付けさせてやればいいのか、というような議論を本格的にしなくてはいけないということが示されたということです。

そのためには、まず個人に開かれた教育課程でなければならない、要するに学習する子どもの視点に立たないと駄目なのだということです。これも以前から言われていることですが、社会に開かれた教育課程というのと、個人に開かれた教育課程を一体として捉えていかないと駄目なのだという理念が示されたのです。

OECDの「Education 2030」の話で言うと、成熟型社会、循環共生型社会に向けた社会のありようと教育との関係です。要するに地球は一つという考え方にもなろうかと思うのですけれども、それは人々のウェルビーイング、幸福というものをどう考えていくのかということに結びついていきますし、子どもの視点に立つというのは、エージェンシーに関連する内容になってくると思います。

そこから、3つの改善の方向性は出てきます。学習指導要領の枠組み（フレーム）自体を見直し、この3つの「資質・能力」論の枠組みを形として表せということで、最初に見た目標構造の変化というところに行き着くわけです。

アクティブラーニングについては、先ほどこの用語を使わないと申し上げましたが、アクティブラーニングというとメソッドのように捉えられてしまう、学び方みたいな形で捉えられてしまうことを避けたいということがあったようです。要するに、アクティブラーニングというのは、この3つの資質・能力を育てていく上で一体化しているものなのだという捉え方が重要なのです。

カリキュラムのマネジメント、これは簡単に言うと各教科間とか学校と地域との関係でカリキュラムを考えなさいと言っているのですけども、他方では教科を再編するというところに繋がっていきます。要するに教科再編論に結びつく、そういうところまでいくようなマネジメントを期待しているというふうに理解してよろしいと思います。

このことに対して中学や高校の保健体育の先生がどれぐらい危機意識を持っているか、心配になってしまいます。小学校の先生は、今、道徳だとか英語だとかが入ってカリキュラムが密になってきています。そうすると、それぞれの教科の中で横断して、資質・能力が育てられるものであれば思い切ってそれらをセットで、いわゆる単元を構成していくのだっていうようなところまで、次回の指導要領の中では、入ってくるのではないかと予想されます。そこで、学校の先生方の創意工夫というのが求められると思うのです。

それともう一つ、学びの質です。どのように学ぶのかということを重視する。先ほどの「主体的・対話的で深い学びとの関係」が非常に強いわけです。そこで強調されるのは資質・能力、何ができるようになるのかということと、何が身についたのかということです。

その結果、これは学習評価を充実させるということにつながります。このことは今回の指導要領に限りませんが、前回の指導要領から、評価論というのは、ある意味ちょっととんがった形で出てきています。おそらく学校の先生たちは、授業ごと、あるいは単元ごとの評価に追いまくられるというような状況が出てきているのではないかと推察します。ヨーロッパ型の習得主義にみられるように、学んだことをいかに資格化するか。そういうシステムをとろうとしているのではないかと思います。ただし、日本はある程度、それに失敗して

います。中学や高校にいくときには資格試験をしていません。先生方の評価の内容に期待するということになります。日本では履修主義に基づいて各学校に評価と評定がまかされていて、そういうものを補う上でどうしても厳密な評価論が出てきてしまう。そこでは、評定と評価の混同がさらに進行するとともに、先生方が日々の授業で細かい評価に振り回されてしまうのではないかと危惧しています。

結局、「見方・考え方」というのが出てきたのは、各学校における既存教科の社会的存在論を論ずる必要性が出てきたということです。では、そのようなことが論じられない社会とはどういう社会なのかというと、ここまで到達すればあなたはある程度社会に通用しますよ、ということが言えた時代です。みんな同じような能力、同じような知識を身につければ、それでオートマティックに役に立つという社会であれば、おそらくその教科の存在というものをあらかじめ証明する必要はなかったのではないかと思うのです。

ところがそれを必要とされる社会というのは、まさに21世紀社会の変化です。これは人類にとってまさに未知の社会なわけで、我々はどういう社会に向かって何が問題として起きてきて、そこではどのような事態が進行するのか、よくわからないのです。今まで、ある程度想像ができる、ウェルビーイングな状態も、物が獲得できれば幸せになると単純に思っていました。みんなが、ヨーイ・ドンで同じような目標に向かっていけた社会だったので。ある意味で、人々は食を満たされ衣服を満たされ需要を満たされて、いわゆる安定というものを手に入れたように見えたのですけれども、その安定を手に入れて、自由にあなたが何でもやっていいのですよって言われたときに、では、その自由を自分たちが行使して、それぞれが自由を求め始めるというのは、ある意味ではバラバラになっていくということでもありますから、これは社会が不安定になっていくということとセットになるというふうにもなる社会なのです。

こういう社会の中で、自分の意思や自分の考え方というものをきちっと持って、それに対峙していく、そういう資質や能力っていったい何なのだろう。その教科の中でそういう資質・能力を育成しているのかということを、よりシビアに求められるようになつたのだと思うのです。

3つの資質・能力に沿ってずっと審議していたわけなのですが、審議後半になって突然、教科の見方・考え方を示されてきました。我々は非常に混乱いたしまして、説明する方も混乱していました。なぜ、こんなものが必要になってくるのかということなのですね。

2. 「見方・考え方」の見方・考え方

今まで各教科固有のタテの原理で、保健体育科、国語科、数学科、…それぞれの教科の原理でもって動いていたわけです。ところが今回は、まずはヨコの原理で教科をまたいで、全ての教科が何を目指しているのかという共通の汎用性のある資質・能力というものを展開しなさいとなったのです。各教科固有のタテの原理で動く内容と、汎用性のある資質・能力、これを言うのは簡単なのですが、これを橋渡しするものはこの2つだけでは見えない

わけです。

「教科等」が、なぜ成立するのか、その教科でしか考えられない見方・考え方とは何ですかと問われたのです。これを明らかにすることで、これまでやってきた（下記に示した）（ウ）をベースにして、（ウ）から（イ）を結びつける従来の方向性とは異なる、（ア）①の汎用的なコンピテンシーや②のメタ認知等から（ウ）に繋げていくための（イ）とは何かというような、そういう逆の考え方が出てきたということです。

（ア） 教科等を横断する汎用的なスキル（コンピテンシー）等に関わるもの。

① 汎用的なスキル等としては、例えば、問題解決、論理的思考、コミュニケーション、意欲など。

② メタ認知（自己調整や内省、批判的思考等を可能にするもの）

（イ） 教科等の本質に関わるもの（教科等ならではの見方・考え方など）

（ウ） 教科固有の知識や個別スキルに関わるもの

ですから、最初に出てきたのが（ア）の①と②ということになります。意欲というのは今まで関心・意欲と言っていたものも含みますけれども、どちらかというと、この問題解決を自発的に自ら主体的に学んでいくというその主体性という意味が込められております。それを実現していくためには、自分と対象だけではなくて、その自分を超えるメタ認知といいますか、もう1人の自分というものを想定して、その自分がどういう思考力、判断力を発揮しているのかということを自分なりに考えていく、これが深い学びということに繋がっていくと思うのですけれども。そういうことを可能にするような認識のしかたというものを実現しなければならないのです。これは、考えてみると非常に高度なレベルのことを言っているのですが、それなりにそれぞれの次元の中でこういうことを追求しなさいといっているわけです。

ですから順序としては、この（ア）と（ウ）が最初に示されたのだけれども、なかなか（ウ）から（ア）へと結びつけることができないので、だから（イ）の段階で、教科の本質に関わる見方・考え方を示すことによって（ア）と結びつけなさいということです。このように（ア）が前提として出ているものの、これと（ウ）がなかなか結びつかないので、これは教科の存在論というものをしっかりと示させないうまく関連させることができないことからの「見方・考え方」なのだろうというふうに考えます。

①汎用的なスキル等については、思考力・判断力・表現力のことです。②のメタ認知については学びに向かう力、人間性というような表現で、従来の関心・意欲・態度よりもっと高いレベルの学びに向かう力、要するに応用力、汎用力だとか、あるいはそれを求める人間力であるとか、そういうようなことを意識して書かれてあります。

そして、（ウ）の教科固有の知識は、個別に関わるものとしての知識・技能ということになります。先ほど冒頭で述べたように、小学校体育の場合には動きや技能ということになると思いますけど、中学・高校の場合は知識・技能になります。以上のような考え方が、3つの資質・能力が出現してくる一つの背景にあるのです。この3つの資質・能力を各教科でど

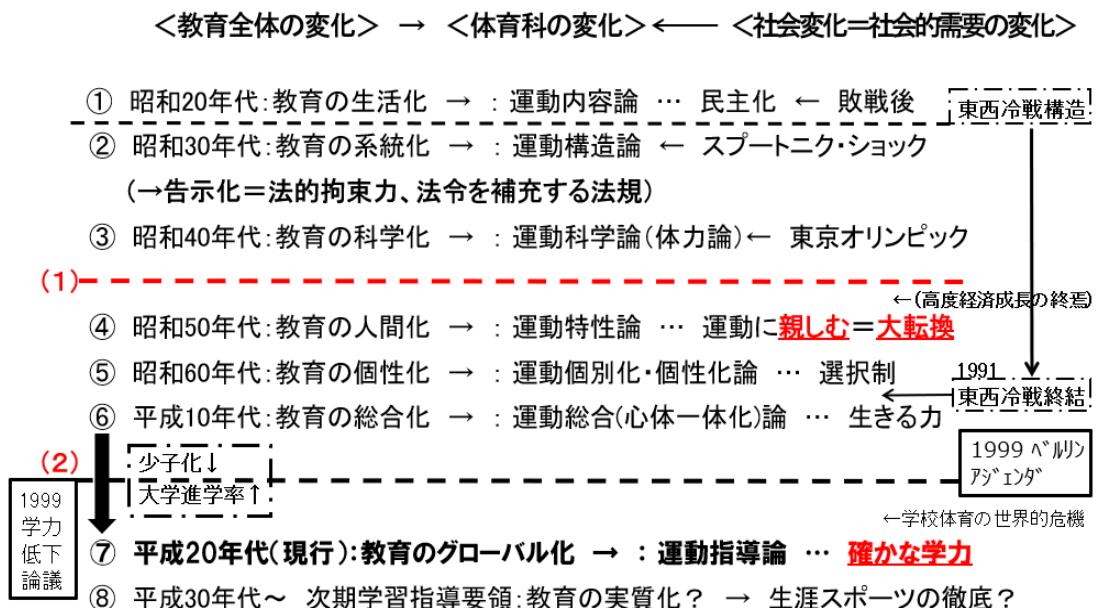
のように扱うかということを、しっかりとその教科の独自性として示すのが「見方・考え方」なのだという、まさにここでの見方・考え方になるのです。

3. 教科体育における「見方・考え方」

では、体育における見方・考え方はどうかというと、今までお話をてきた内容を踏まえると、実は体育については、もう既に1980年代ぐらいから意識されていたというふうに思いました。

体育の社会的構造で、竹之下先生がいみじくも言っておりますけれども、授業の枠の中で技能や知識を身に付けるわけですが、それはそれぞれの社会のいろいろな変動・変化の中で変わっていくものなのです。竹之下先生は、その変化する中で教師を媒介にして、それをどう社会に還元していくのか、それは子どもたちが集団や社会に向かってどういうふうに開かれていくのかという構造をすでに書いています。

そしてこれに従って、実は体育の場合には運動の特性論というものが出てきていると考えられます。このようにこれまでの体育を社会的な背景から、戦後の変化として見ていきますと、それぞれの年代に分けて、指導要領の変化の中で運動の捉え方がどう変化してきたのかということが、下記のように示されます。



(1) の赤ラインは高度経済成長の終焉の時代です。ここでやはり大きな変化があったと考えられます。

そして(2)のラインで、また変化があったわけですが、体育に関して言えば(1)の変化の方が非常に大きいというふうに思っています。具体的には、産業化社会から成熟型社会へ

の転換です。これに伴って学校体育は、これまでの身体や技能的な供給の論理から運動文化としてのスポーツの需要というものを、子供の立場で考えて、その運動を求める必要と欲求の充足の重視というところに舵を切ったというところです。指導要領でいいますと、「運動に親しむ」という言葉が昭和50年代の指導要領、すなわち80年代の指導要領の中に入ってくるということは重要なわけです。

知識基盤社会ということが言われて、だいたい2000年前後に学力低下論議というものが起るのですが、ここから、確かな学力だとかそういうことが言われ始めます。要するに生きて働く学力が大切で、やはり単に基盤的な力を身につけているだけでは駄目なのだというような議論が生まれてくるわけです。あるいはまた他方では、そのために基礎的な力というものを身につけさせることも大事なのだということが言われてくる。

知識基盤社会というのは、当時、どのように説明されているのかというと、21世紀社会は新しい知識・情報・技術が、AIも含めて、あらゆる領域における活動の基盤として、飛躍的にその重要度を増すと言われる社会です。だから、まさに未知との遭遇がどんどん出てくる社会なのだという意味では、グローバル化や絶え間ない競争と技術革新が促され、それに伴う幅広い知識と思考力に基づく判断というのは一層重要になると予測されます。先ほどの知識・思考力・判断力、そしてそれを表現していく力が、重要なのだということがもう既にこの時点できれいに述べられているということだと思います。

4. 教科「保健体育」における「見方・考え方」の課題

私は、80年代からの体育の変化というはある意味で、他の教科に比べて早く起きているというふうに考えていいと思っています。それは体育の中で非常に大きな矛盾というものがいち早く出てきたからです。スポーツは好きだけど体育は嫌いだ、といったような言い方ですね。同じ運動を巡って、学校の体育は嫌いなのだけど、私はスポーツ好きなのですよねという、そういういわゆる矛盾というものが、いち早く実感されるのは、実技教科の特徴だろうと思います。

そのなかで、運動の特性論であるとか、中学・高校の選択制であるとか、あるいは技能以外の観点である「関心・意欲・態度」だとか「知識、思考・判断」というものも重視しようという、そのような方向性というものがいち早く出てくるということです。ただし、教える立場の人たちはどうだったかというと、様々な誤解がありました。例えば、「楽しい体育」っていうのは、体力や技能を高めないと、あるいはできないと楽しめないというような言い方。それから、中学・高校の選択制で言いますと、自分たちが選択していいのだとということになると、遊ばせておけばいいのかっていう、そういうような見方がありました。これらは、明らかに現場教師による運動の特性論への誤解です。

それに対して、私は常に「価値への自由」ということを言ってきました。これは、新たな価値というものを、新たな種目選択の中で、自分たちのやり方や学び方というもので選択していく自由ということなのです。つまり、対話的で主体的で深い学びというものをセットに

した学習、そしてその学習に対する指導の重要性を意味していたはずなのですが、これに対して非常に大きな理解不足があったということになります。

だから、そのような曖昧な受け止め方の中で、評価というものが出てくると、これを従来の体力や技能への評定という形で捉えてしまい、そのことによって明確な序列をつけて、さらにその自分たちの曖昧な見方、まさに見方・考え方が曖昧だということなのですけど、それを補おうとするという逆のベクトルが働くということが起きてきていたのではないかという気がします。

私はそれを「失われた40年」というふうに書きました。これはちょっと語弊があるかもしませんが、理念は変わるものだけれども、教師は変わらない。なぜ、変わらないでいられるのかというと、一つは学校という組織の特殊性があるからだと思われます。

学校の場合、なかなか先生方は校門を出ませんので、保護者には対峙しているのですけれども、どちらかというと自分たちは変わらないで、保護者や子どもたちが変わっていくと嘆くと言いますか、かつてはこういうことがちゃんとやれたのに、なぜ、できないのだという言い方になってしまします。そういう意味では新たな社会へ対応できない環境にいるということです。

それから、特に中学・高校の先生方は、教科指導と生徒指導では、生徒指導にものすごく大きな力を注がせられるわけです。今、いろいろな部活の問題も出てきていますけれども、部活動も、結局は生徒指導の一環というふうに捉えている学校が非常に多いわけです。

中学・高校の先生方は、そちらの方に力を入れた方が学校の中でより評価される。それは、逆に言うと知的教科の方は、その教科指導の中で産業社会が要求する教育成果というものが、そこで認められていくわけです。けれども、実技教科は産業社会の中ではなかなか認められないということで、どうしても、学校の中における教育的機能の不平等と教員のパワーの不平等と言いますか、そういうものが起きます。だから、中高の先生方は、教科指導よりも、生徒指導や部活といった教科外活動の方に力を入れ、そこにプライオリティを持つてしまうという構造が存在しているということです。

体育教師は、その不平等を補って自分たちが評価されるような活動に力を入れ、そういうことに興味・関心を持たない教科の先生方は、部活では非常に苦労するといいますか、使命感があまりありませんので、なぜ、こんなことをやらないといけないのかというような見方が出てきてしまうということなのです（いわゆる「働き方改革」の要請へ）。

これに対して、私は新指導要領の新しい総則の中で、カリキュラム・マネジメントということの意味も含めて、特に初めて部活とは何のかっていうことを教科調査官と一緒に考え、定義いたしました。基本は生徒の自発的・自主的な参加により行われる部活動というふうに明確に定義したわけです。

特に、保健体育の先生方は、学校における地位と役割の中で、指導の言葉がどうしても指示命令が中心になります。だから、選択制授業をやると何も教えることはないと言うのですが、結局、そういう体育教師ほど教科指導で何を教えているか、どういう言葉を使って

いるかというと、内容というよりはほとんど指示命令的な指導をしていることが多いようです。自分の手のひらに子どもたちを乗せて、自分の思うように動かせることがいい指導なのだというような誤解があったということです。

他方で、特に中学・高校では「見方・考え方」の課題として、中学校では分野、高校では科目ですが、これまでの保健と体育の立場は非常に問題になってくるというふうに思います。

将来、10年後に、教科の「保健体育」はひょっとしたら成立しなくなる危険性があるのではないか。教科のパラダイムとして体育と保健の融合は、実際に可能なのかどうかということを本当に真剣に考えないといけない時代になってきました。

高校の先生でいうと、保健は2単位ありますから、この2単位が減ると、おそらく高校の体育の教員は2単位分いらないということになります。こういうことを考えたときに、やはり保健と体育は21世紀社会において、ヘルスとスポーツの関係として、どういうふうになっていかないといけないのかを、大きな目で考えていかないといけない時代に来ているのではないかということです。

目的としてのスポーツ、手段としてのスポーツ。目的としてのヘルス、手段としてのヘルス。どちらなのかというと、今回のスポーツ基本計画部会の委員もやっていて思うのですが、もう手段論が横行しています。いろいろな省庁が入ってくると、ある意味でスポーツというものが食い物にされていくのだなっていうことはよくわかるのです。

本当に自分たち自らが、ウェルビーイングな状態を作っていくところで、スポーツというものがどういう意味を持っているのか、ヘルスというのは、スポーツとどう関係しなければならないならならないのか。こういったことをきちんと考えないと、教科の保健体育の見方・考え方というのは成立していかないのではないか、社会に開かれた学びにならぬのではないかと思います。

今まで強迫観念で、とにかく同じ方向にみんな一斉に向いていれば何とか座布団に座れるのだというそういう状況から、楽しさ、自由を享受する中で、同時に不安というものをどういうふうに自分たちの力で解消していくのかという時代に入ってきたていると思うのです。この楽しさというものをベースにして体育を考えたときに、それが社会の求める内容や望ましさ（価値）とどのように関係してくるのかということなのです。

どのようにして解消していくのは、なかなか難しいのですが、保健体育を支える「見方・考え方」のもとになっているのは、何なのかということを今一度、きちんと考へる必要があると思います。

1つは、体育も保健も科学的合理的なパラダイムを持っています。体育は生理学、物理学、社会学やいろいろな学問のまさに相乗効果の中で成り立っています。保健も医学や精神医学、そういう健康分野の科学によって成り立っています。しかし、これらの見方・考え方をバラバラなままにしておくと、どんどん分散化して1つの見方・考え方にはまとまらないのです。

これをまとめるためには、ちょっとこれも極端な言い方かもしれませんけど、レビ・ストロースが言う、「野生の思考」というのが必要なではないかと思います。体験とか経験というもの、楽しさというものを享受する中で、自分たちがそこでいろいろ学ぶ内容をつなげていく。学習者が主体的につなげていくと同時に教員も繋げていって、教師もそこから学んでいく。あるいは、いろいろなものを見立てていく力、あるいはそれはたとえる力もそこでは発揮されるだろうと思うのです。つまり、メタ思考が必要とされ、発揮されるということです（それが、資質・能力につながります）。

そのために、ちょっと手前味噌ですけど、今回、体育理論というものが前回の指導要領に引き継いで、高校では 6×3 の18時間、それから中学では 3×3 の9時間、必修として実施されることになりましたが、この実現に個人的にはずいぶん尽力しました。やはりこういう体育理論の中で、異なる実技実践というものをつなげたり、見立てたり、例えたりしていく思考というものを養っていく。このことが、ますます重要になってくるのではないかと思っています。

そのことを通じて、体育の先生たちは、自分たちの保健体育の教科としてのものの見方や考え方というものを、より研ぎ澄ますことができるのではないかと思います。子どもたちとともに学べる、あるいはそれを考える手がかりを得ることができるのではないかと思うのです。

ですから、今後の10年間、現場の中で体育を担当する先生方の学びが、あるいは子どもを通じた新たな学びというものが、教科の見方・考え方について、次回の指導要領の中で保健体育がまた存続する、あるいはより発展的に、その重要性が認められるというような、そういう指導要領にしていただきたいなというふうに思っております。

<杉本厚夫（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）のコメント>

先日、「分数ができない大学生」を書かれた西村和雄先生と対談する機会がありました。ゆとり教育を批判して、学力向上のための教育を主張された方ですが、その時、学力について考えさせられました。何かができるということが、学力ということなのかと。

以前から不思議に思っていたのですが、保健体育の教員採用試験にどうして実技試験があるのでしょうか。そこには、「できれば教えられる」という経験主義の教育が存在するのではないでしょうか。その背景には、自己の身体を自分の思うがままに動かすことができる、いわゆる「支配」あるいは「所有」の論理があるように思います。しかし、一方で、たとえば病気の身体のように、自分の身体は自分の思い通りにはならないということも経験しています。また、それぞれの身体の個別性を無視して、みんな同じ目標に向かってできるようになることを体育は目標にしていることにも矛盾を感じます。

そう考えると、体育は「できる」で評価できない科目ではないかと考えます。

「170cm の私が、バスケットボールのダンクシュートができるようになるためにはどうすればいいでしょうか？」

一般的には、高く跳べるようにジャンプ力をつけるトレーニングをします。こんなのはどうでしょうか。「リングを下げる」。そうすると今の僕のままで、十分にダンクシュートすることができます。そうなんです、これからの中年社会では、「下げる」とか「減らす」といった発想が必要になってきます。ちなみに、SDGsはSurvival(生存のために) Downsizing(どれだけ減少させるかの) Goals(目標)だと考えています。

これは、スポーツに自分の身体を合わせるのか、自分の身体にスポーツを合わせるのかのPhysical Fitness(身体適性)の捉え方の違いです。前者は近代の成長社会での捉え方で、Physical Fitnessを「体力」と誤訳してしまいました。つまり、学習者が主体ではなく、学習対象が主体になっているのです。その点で、後者は学習者に合わせて課題が設定されることから、個別最適で「主体的な学び」になっていると言えるでしょう。

「3段、4段、5段の跳び箱は、どんなふうに学習しましたか?」

多くの人は、3段跳べたら4段、4段跳べたら5段と、右肩上がりの成長型の指導を受けたのではないでしょうか。こんなのはどうでしょうか。3段、4段、5段の跳び箱を跳んでみて、自分に合った段数を見つけましょう。つまり、Fitness(適性)を見つけるための跳び箱です。こんな教育がなされてこなかったから、勉強ができるから医者・弁護士になるといったように、不適切な職業選択をしてしまいました。それでは、決して「Well-Being(健康)」な人生を送れません。これは、自分との「対話的な学び」と言えるでしょう。

今回の学習指導要領で謳われている「主体的・対話的で深い学び」は、このように「できる」ことから開放されたところに生じます。今、子どもたちの素朴な疑問「なんで、逆上がりはできないといけないの?」に、真摯に向き合わなければならないのではないかと考えています。

《第15回セミナー》

子どもを本当に理解していますか？

—子どもに寄り添う教育—

土佐いく子（会員：和歌山大学非常勤講師）

1. コロナ禍での子どもたち

コロナ禍で子どもたちも大学の学生たちも本当に大変な状況の中で、悲鳴もありながら、健気に一生懸命生きているなというふうに思っています。私はこの2年間いろいろ考えることが多かったですけども、教育っていったい何だったのか、学校って何だろうって、子どもを理解するって、どんなことかということをもう1回原点に戻って、問い合わせながら、学び直したいなという思いを強くしている2年間です。

先日、ある地域の先生方の研修会に参りました。言葉の力や自己表現力ということで話をしてほしいというので行かせてもらいました。よくよく聞いたら、ひとり一台のタブレット、ICT教育を熱心にされている地域で、そういうものが一番苦手な私を呼んでどうするのかなと思いました。研修が終わってから、代表の校長先生が「ショックでした。4月からタブレットで、自分はあまり得意ではないけども、ずっとタブレットの前にいて、子どものことが見えてなかつたです」と言われます。

何のために、どんな教育をするためにこのタブレットを活用するかということが、どこかで抜け落ちて、操作にばかり目が行き、学校現場が今、ずいぶん振り回されています。そのような意味でも、私はもう1回、初めに子どもありき、ここに帰らなきやいけないと強く思います。

今、和歌山大学に行ってます。学生たちがどんな思いで、今コロナ禍で、大学に来ているかなというお話をしながら学生たちが、いろいろ書いてくれます。「先生、聞いて」をちょっと読んでみましょう。

「受験とコロナの両方で、夏から冬まで薬を飲まないと毎日吐き気、ストレスがたまって生理前に鬱になる」のだそうです。「コロナでリモートになると友達にも会えず、人の機嫌や音や匂いに敏感でしんどいです」と言います。

「コロナ禍で父親の仕事ができなくなり、仕事がなくなって、お父さんが不倫をして離婚してしまった」のです。「自分の父親が、自分の鏡だったので、今まで自分を支えていたと思うのは崩れ落ちたような気がしている」と。「これから母の収入で家計が苦しくなり、給付奨学金が取れるか大変に心配だ」と学生が書いてきました。

それから、これも多かったです。「物心ついた頃から人に好かれるように、嫌われないよ

うにと自分を着飾ってきました。本当の自分が信じられなくて、今、なんとか努力していますが、コロナで再びリモートになって、面と向かって人と出会えなくなれば、前の自分に逆戻りしそうで不安になっています。こんなことを先生に書ける自分に驚いていますが、少し吐き出せてありがとうございます」と書いてあるのです。素の自分をなかなか出せずに来て、何か喋りやすい先生と出会って、自分の心を開いて、「先生、聞いてよ」と書いています。

「部屋に1人。孤独感、何のために生きているのか、これから何のために生きていけばいいのかわかりません。ふとしたときに死にたいと思ってしまいますし、自分の中にいくつかの人格がある感じで、どれも本当に自分でどれも自分じゃない気がします。生きていると楽しいことがあるとも思うのですが、生きていると苦しいことがあると思う。みんなに言える勇気がないので、先生にだけ打ち明けたいと思います」と、こんなふうに書いています。

匿名だったら通信に載せても良いと言っていますが、本当はみんなに聞いてほしいのでしょうか。そんなこんなの中の心の声を聞きながら、自分が今どんな仕事をしたらいかななどということをずいぶん考えさせられています。

2. 困った子ども？

新任の先生から悩みの相談に乗ってくださいってことで電話がかかってきました。「小学校の4年生を担任しています。キレるし、暴力ふるうし、喋り続けて授業を妨害するのです。それに同調する子たちで出てきて、よく1年もったなあ」と言います。若い女の先生なのですが、もう自分は教師に向いてないのではないかと言うのです。校長からは指導力がないって言われて、アンケート取らされて、書かされたそうです。来年は担任を持てるかわからないと言われていると。

子どもが、困ったことしますよね。暴力をふるう、授業を妨害する。その子どもの困った言動の向こうに何があるかなというふうに見るのはなくって、困った言動を叱るという、そんな対応が校長も含めて学校現場にもまだまだあるのです。実は、その子はもう4年から中学受験に追い回されて悲鳴あげているのです。そんな背景があるにも関わらず、お前の指導力がないからこうなるのだという、教師の指導力の問題にされています。そういう状況もある学校現場の中で、私はいっそ子どもを理解するとは、どんなことかということを改めて学び直さなきやいけないところに来ていると思っています。

困ったことをする子どもは、本当は子ども自身が困っているのです。

でも、何に困っているかなあというのが、今は、なかなか見にくくなっています。忙しいというのもあります。教師に余裕がないということもあるでしょう。子どもが泣いてくる。「何で泣くの」と叱ってしまう。「痛い、痛い」と言っても、「これぐらい大丈夫や」って言われてしまう。「痛い」って言われたときに、「そうか、痛かったんやね」って、本当は言つて欲しい。泣いていても、「泣くほどつらかったのか」って言って欲しい。子どもがSOSを出していても、パーンと否定するから、本当のこと言うと聞いてくれないというので、子ど

もたちってそういう場合、どんどん心のふたを閉めるのです。わかってくれないってね。

あるいは、勝ったか負けたかとか、評価をするとか、そういう目で子どもを見てしまうと、ついついその穴にはまってしまうかなと思ったりもするのです。

3. 子どもの言葉の背景にあるもの

この間、道徳の研究授業があつて、言葉のことをやるからというので講師で行かせてもらいました。一番、人を傷つけることは何だって話になり、「死ね、死ね」というのが嫌だというわけです。先生は一生懸命に「死ね」って言われたら皆さんはどんな気持ちになりますか、それを書いてごらんという授業をするのです。私は講師ですから後ろで見せてもらっていましたが、そうだろうかって疑問を持ちました。

ある学校の研究授業に行ったとき、滅多にない事例ですけど、教室のドアにバリケードを張って担任の先生を入れないっていうのですね。その中に、黄色い帽子に「死ね、死ね」って書いている子どもがいるのです。私は教師と思われてないから、いろいろ喋っていると、5階から飛び降りて自殺して、死んでいる絵が描いてあるのです。血だらけになって矢印がカタカナで俺って書いて、自分が死んでいる絵なのです。それを見せる。「自分は生まれてこなかつたらよかった」と彼は言うのです。彼の帽子の「死ね、死ね」というのは、自分は生まれてこなかつたらよかったという「死ね」ですね。私は「死ね、死ね」とう子どもの心の声に触れずして、「言われたらどんな気持ちになりますか」という授業100回しても分からぬと思う。でも、そういう道徳がまだまだあって、言っている子どもの心の声に触れない仕事をしていても、教育は成り立たないとすごく思っています。

4. 子どもの行動の理由を考える

私は小学校の現場おりましたから、いろんな経験をして、そよううまくはいかなかつたです。ゴメンゴメンがいっぱいあるのです。4年生の2学期に「りょうへい君」という男の子が転校してきました。彼はなかなか腰骨が立たなくて10分、15分、座っていられなくて、「りょうへいくん、ちょっとよく座ってごらん、靴、履いてごらん」って言ったら、「なに!」とかいって、その机がボーンと飛ぶわけです。クラスの子どもは「先生、かっこいいやつが転校してきたなあ」と言うわけです。反抗できる姿がね。彼とは格闘しました。

算数の分数のテストをしたとき、彼は、だらっと寝ながら、それでもテスト用紙を上から下まで見るわけです。そして、おもむろに、ぐちゃぐちゃとして後ろへ投げました。これを見たら腹が立ちますね。でも、たまたま少し私も落ち着いていたのでしょう。だからテスト用紙を拾いに行って、りょうへい君の目の前に置いたのです。クラスの皆が一齊に見ます。さて、ここで先生はどうするでしょう。私は「りょうへい君は俺もこの試験できたらいいのになと思ったから、大丈夫よ」と言ったらクラスの子らは、「はい、そのとおり」と言って、すっと静かになってテストを続けるのです。そして、彼の前に座って「2分の1、昨日やつたやろ、あの問題といっしょ。書いてごらん」と言います。その姿をチラチラ見ながら、周

りの子どもたちは「このクラスはほんまの姿を出しても大丈夫や」って安心するのです。子どもってすごいですね。自分が叱られているわけでもないけども、友達へのこの対応を見て、他の子どもたちが安心をするのです。

何を言っているかというと、テストをぐちゃぐちゃにしてほうりながら、先生、僕もこの試験できたらいいのに、100点を取りたいという彼の願いですよね。やっている行為は、腹が立ちます。目の前で挑戦的ですから。そこで「今、何やったんや。そんな嫌やったらテストを受けなくてよろしい」と言っていたら、このドラマは始まらなかつたと思います。

私も、いつもいい先生をしているわけじゃないのです。たまたま彼の試験を見ている表情と、作文教育を通して子どもの見方みたいな勉強を少しさせていただいたので、土壇場での学んだことがぱっと出たのですね。

5. 保護者の話を聴く

友達の顔につばをひっかけて手をひっかく、ごめんが言えない2年生の話をします。この子も2年生になって転校してきました。ほっぺたが白くて、ちょっとふっくらしているんですけど、実はある病気をしていて薬の副作用でフワッとしているのですね。なかなか笑わない子です。目がなかなかあいません。障害があるわけではありません。友達がそばにいたらツボをぱっとかけるとかね、あるいは手を引っ搔くと筋ができるぐらいすごく強く引っ搔くのですね。私はてっきり虐待を受けてそうなったのかなあと思ったりしていたのですが、そうではないのです。本当に目が離せないという2年生の子と格闘しました。

お母さんにも詳しいお話を聞かせてもらおうと思って10時半の休み時間に電話をしました。「おかあちゃん、もし、お時間があったら1年生のときのこと、幼稚園に行っていたときの話とか聞かしてもらったら嬉しいなあ」と電話をしたのです。お母さんの声が、ぱっと変わったから何かあるなって、すぐ思いました。「とにかく3時半に行けます」というので、「お待ちしています」ということで電話を切りました。

お母さんは、3時10分ぐらいにきました。なんでそんなに早く来たかわかりますか。「また、自分の子育てベタを先生に叱られると思った」というのです。そう思って、待てなくて、3時10分に早めに来られたのです。お母さんのそばに行って、「おかあちゃん、いろいろあったんやね。今日までいろいろ頑張ってきはったね」。私はこう言いました。それだけしか言ってないのに、お母さんその場で座り込んで、本当に号泣したのです。

落ち着いて教室に入って、一番の社会性が獲得されるような3歳とか4歳の頃に入院をしていた話。今も薬を飲んで副作用もあって学校に来ているという話。それから1年生のときに前の学校で心を閉ざして誰にも心を開かずに、一切学校でも喋らずに1年生を過ごしたっていう話も聞かせてもらいました。

友達に、引っ搔かれたり唾をかけられたりという、自分がされたことを、全部繰り返しました。先生は「自分がされて嫌なことを人にしたらいけません」と言いますが、自分がされて嫌なことするのです。虐待なんかもよく連鎖したりしますよね。自分がされて嫌だったこ

とをしてしまうのですよね。

私は、病気の病名は言わないけども、あかねちゃんが前の学校で心閉ざして友達につばをかけられ、とてもつらい思いをして、今日も、涙いっぱいいためて、この学校に来ているという話を子どもたちにさしてほしいと、私はお母さんに言いました。「人間の真実を語らずして、人は繋がることができない」と思っています。お母さんから「先生を信用してお任せします」って言ってもらったのです。

6. 子どもの話を聴き、子どもに伝える

私は、2年生の子どもたちに大事な話を静かに語るようにしているのです。次の日、あかねちゃんの話を静かに語りました。私はその時、2年生ってすごい、人間の真実を語ればちゃんとと言葉が届くと思いました。ほんとに言葉って、目から心に届くような届き方をするのです。

それで、子どもたちは一層、優しくしてくれるのであります。あるとき、初めての図工の時間、グループごとに花の絵を描いていました。あかねちゃんは幼い手をしていて、手の発達は大脳の発達と関わっていることが多いのですが、形が取れないかなと思ったわけです。しんどいかなと思いながら見ていたんですけど、案の定、彼女は何も描かなくて。私は、絵を描いている子のところを回って、「ゆきちゃん、綺麗な色やな」とか、「けんちゃん、その線いいね」とか言って褒めて回るのです。

そうするとね、あかねちゃんがふっと立って、私が「いい色」と言った友達の前に行って、めったに目を見ないように、じっと顔を見て「へた」と低い声で言うのです。突然そんなことが起きる。そんな時、どんな目線を向きますか、どんな言葉をかけますか、どんな対応しますかと、教師はいつもそのことが問われているなど、私はつくづく思います。そんなときのために、自分が豊かな学びをしないといけないのだろうなと思っているのです。

たまたま私はそのときにあかねちゃんの方を向いて、「どうか、あかねちゃん、前の学校で一生懸命描いたのに、下手と言われて悲しかったことがあってんなあ」と言ったら、私をじっと見ました。じっと見て、「なんで知ってんねん」という顔をしました。

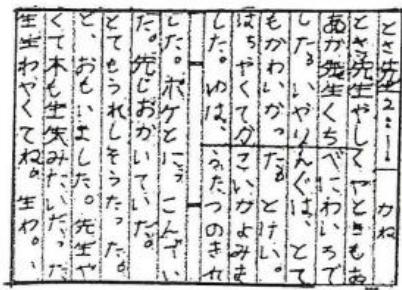
でも、教師は言われた方も嫌だから、どちらもフォローしないといけない。言われた子に「こんないい線が出たのに、下手と言われて嫌やったな」って。「でも、あかねちゃん、ほんまはあかんこと言ったなと思っているけど、あかねちゃんいっぱい悲しいことがあって、今は素直にごめんって言われへんねん。でもね、必ずごめんって言える日が来る」。これは理念で言っているのではなく、ほんとうにそう思うのです。「ごめんって言える日が必ず来るからな。力貸してよ。だから今日は先生があかねちゃんの代わりに謝るわな」って。私はもう11月頃まで、何回も「ごめんな」って言って、子どもたちは「いいよ」とか言う。それをあかねちゃんはじっと見ているのです。そうすると、友達と少し遊べるようになったりして、だんだん変わっていくのです。

私は月に1回、書きたいお話を、書きたいだけ、枚数も制限しません。自分の言葉で本当

のことをつづろうという作文教育をずっと自分の仕事の真ん中に据えてやってきています。あかねちゃんは最初、書いたのは1学期で、その後ずっと書かなかつたです。その日も作文を書きたくないと言って、ふてくされてドアのところに座り込んでたのです。

他の子たちは書いているので、「あかねちゃんおいで、先生と話しをしようか」と椅子をこっち持ってきて2人でちょっとお話をすることになったのです。あかねちゃんが、ずっと私の顔をジロジロ見ていたと思ったら、「書いたらか」って言うのです。

書き始めたのがこの文章です。



土佐先生という題です。「とさ先生やさしいときもある。あか先生、くちべにわいろでした。」と丸がついてて、文意識があるんやなあ。「いりんぐは、とてもかわいかつた。」小さい「つ」はわからんから教えたのですね。「とけいはちっちゃくてかっこいいかみました。ゆびわはふたつできれいでした。ポケとにつっこんでいた。先生字を書いていた。とてもうれしそうだった」。

人間の感情がこんなふうにわかるんやな、と思いました。「先生やくて、本も先生みたいだった」。先生やしくて、先生は本も好きみたいだったということです。「先生わやくてね、せいわ」、先生やしくて、先生は、ってまたお話を書こうと思ったのですが、丸を打ったたら作文用紙がうまつたのです。

突然、大きな声で「書けた」と言いました。立ち上がって初めて笑顔を見せたのです。うちのクラスは作文を書けたら本を読むようになっているんですけど、「裏に絵を描いてもいいか」と言うから、「いいよ」と言うと、私の絵を描いて、先生へのラブコールですね。あかねちゃんの発達のファンファーレがあがつたときなのです。本当に嬉しい日でした。

そんな日々を重ねながら、作文の書きたい話しを見つけようって言ったら、いろいろを見つけるようになっています。

こんな話をしてるとちょっとすんなりと子どもが変わったみたいですが、そんなことはないのです。ここに来るまで格闘ですよね。私がしていたことは、しつけるとかそういうことじゃなくて、あかねちゃんの心の声を聞き取って、その聞き取った声を、クラスの仲間に伝えるということをずっとしていました。「今日こんなあかんことしたな、でも、あかねちゃんはこんなんやつたんやで」って。そして、2年生の子どもたちも「人間って成長するのだな」ってことを実感したと思います。

同時に、お母さんの話の聞き役をというふうにずっと思っていました。実は懇談会でその話をしたとき、一緒に泣いてくださるお母さんたちもいて、おかあちゃんのしんどい子育ての話を私は聞かせていただくのが役目かなあと思って、そんなお付き合いをずっとしていました。ずいぶんたくさんのこと学びました。困ったことする子どもは、子どもが困っているのやなって。そこには子どもの育ちたい願いがあるということを改めて学ばせてもら

った、あかねちゃんという子どもの話です。

7. 困らない子が、実は困っている

これまで私は困った子どもの話をしてきましたが、困らない子どもが、実は困っているのです。私は大阪大学に10年おりました。非常に豊かな能力を持っているし、たくさんの面白い出来事もあったのですけど、反面、自分の素が出せないとか、失敗が怖い、自分が嫌い、なかには死にたいというふうに訴えてきた子もいます。なかなかどれが本当の自分かわからないということも聞きました。なかには、勉強ができた礼儀正しかったら大人をだませるっていうことを思った時期もあるということを語る学生もおりました。先生にとって、親にとっても、よい子です。家で良い子をして親の期待に応えるように、学校に来てまで先生の期待に応える自分を演じてしまう。

今の和歌山大学の学生で学童保育を行っていた子が、家でいい子をして、学校でいい子をして、学童で爆発していたと。学童で本当の姿を出していたのです。出せてよかったです。でもそういうよい子たちが、実は非常に自分の中に鬱積したものを抱えながら、ある時、爆発して、自分に向かえば自殺だし、他者に向かったら他殺みたいな事件にもなることもあります。私達は、そのよい子たちの中に潜んでいる心のSOSを見過ごさないでいたいなって思います。

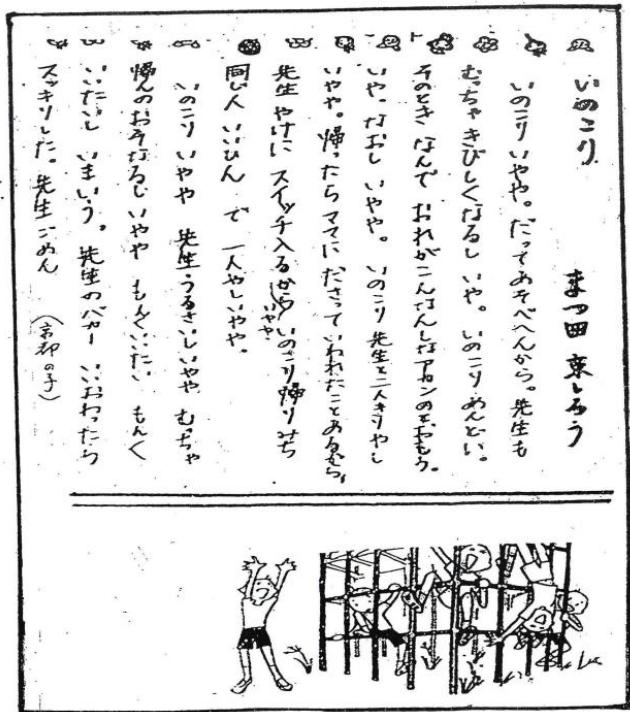
8. 何でも言えるクラス

さて、子どもの権利条約の中の意見表明権について、少し話をしたいと思います。人間は誰でもですが、子どもって自分を表現したいという深い欲求を持っていますね。皆さんもそ

うですよね。髪型だって、服装だって表現ですね。絵を描く、スポーツをする、音楽をする、もちろん言葉もそうですね。自分の自己表現に対してわかってもらいたい、共感してもらうときに人間って豊かになりますよね。そういう深い欲求を子どもたちが持っているのです。

次に作文を見てもらいたいと思います。

京都の先生でコピーライターをしていたのですが、なぜか図書館で私の本を読んで、こんな仕事がしたかったといって、そこからの通信教育を受けて、免許をお取りになって、今、



京都にいる若い先生です。この先生の学級通信に載っていたものです。

「いのこりいやや。だってあそべへんから。先生もむっちゃきびしくなるしいや。いのこりめんどい。そのときなんでおれがこんなんしなアカンのとおもう。いや、なおし、いや。いのこり先生と二人きりやし。帰ったらママにださっていわれたことあるから。先生やけにスイッチ入るからいやや。いのこり帰りみち、同じ人いいひんで1人やしいやや、いのこりいやや、先生うるさいしいやや。むっちゃ帰んのおそなるしいやや。もんくいいたい、もんくいいたいし、いまいう。先生のバカ！。いいおわったらすつきりした。先生ごめん」

これは日記です。先生ごめんと言って、その日記を「はい」って渡せる教室なのですね。それを先生が学級通信にこれを載せて、これをまた読むのですね。親御さんは、この先生はとても信用してらっしゃいます。彼女は「なんでかわからない」と言うのですが、だって、本当のことが言えるクラスでしょう。安心の懐のある教室です。学校大好き、あやか先生大好きです。そういう子どもたちの姿を見て、親はこの先生をとても信頼しているのです。

私は反省しました。何人も居残りをしたけど、誰も「先生ばか」とか日記を書いた子はいません。書けなかったのでしょうか。あやか先生のクラスってすごいなと思います。

あるとき弁当を持ってくる時期があったのですね。

「1年やなぎもとあきちゃん。いつもおべんとうのとき、せんせいはみんなに手をあらわなあかんといっている。だけどせんせいは、手をあらっていません。あきはいつもそれをみています。だけどみんなはぜんぜん気がついていません。ああいうせんせいはなまけものとおもいます。みんなはどうおもう。ああいうせんせい」

一年生です。こういう自己主張ちゃんとできる子ども達は、素敵だなと思います。そんなふうにして子どもたちは、言いにくいことも自分の言葉で表現したいと思っています。

子どもの権利条約の話で意見表明権のこと、国連の子どもの権利条約のジェネラルコメントの第7号の中に子どもの意見表明権のことが書いてあります。オピニオン(Opinion)と言ったときに、堂々と自分の意見が言えることを保証しましょうということなのかなと理解をしていたのですが、実はオピニオンじゃなくてビュー(View)と書いてあるのです。様々な訳があるのですが専門家の方に教えていただくと、必ずしも言語化されてない非言語的なコミュニケーション、たとえば、子どもが泣くとか、あるいは赤ちゃんの目が揺れるとかですね。「死ね」っていうこともそうですね。チック症状が出るとかね。そんな言語でない非言語的なコミュニケーションも、これもまた実は子どもの意見表明なのだって、そこから子どもを読み取ることが今ほど大事な時期はないということを私達もずっと学ばせてもらっているのです。

障害があるわけじゃないけど目が合わない。笑わない。ふらふら席に座らない子がいて、後ろから抱っこすると、抱かれないとピンと来ます。私も子どもが3人いるんですけど、この子は抱かれていないとピンと来ます。お母さんに「おかあちゃん、さえちゃんがちっちやいときにいっぱい抱いてあげたん」と言ったら、お母さんは「自分も親に抱かれてへんからね、子どもを抱くのは照れ臭い」と言うのです。教師は、そのお母さんに「お母さん、抱い

てあげないとあかんでしょう」と説教することではないですよね。親に抱かれずに育ってきたお母さんの生きてきたことを聞き取れる教師でありたいなど私は思っていました。子どもたちはみんな暮らしを背負って学校にやってきます。そこの向こうに親の暮らしがあって、そのことを聞き取りながら共感して、そこから一緒に子育てのことを考えられる、そんな教師でありたいと思ってずっとやってきました。

今、言っている体を抱かれない。これも SOS の意見表明なのだということです。言葉にならない様々な表現から、子どもを理解する、読み取っていくことがとても大事だということですね。あらゆる言動から子どもを捉えていくのだということも、私は生活を継るという仕事の中から多くを学ばせて行きました。

9. 子どもの心の声を聞き取る

最後に、どうしたら子どもの心の声が聞き取れるようになるかということでいくつか述べてみます。

今日のように、子どもを理解ってどうすること、ということを学ぶ機会を持つことがとても大事だと思っています。臨床教育学会とか、いろんな学会などでも、子どもをどう理解するかという「子ども理解」は、今の教育の大きなテーマの一つだというふうに言われています。そのところについて、深い学びをすることが大切だということがまず一つです。

それから、子ども観ですね。子どもをどう捉えるかというね。エミール以降もずっと深い話で子どもをどう見るか。子どもというのは不十分で、叱らないとわからない、指導しないとわからないという対象にするのか。大田堯が言うように、子どもというのは育つ存在なのだ。頭ごなしに上から指導するのではなくて、育つものを援助するのが我々の仕事なのだという捉え方と二つあるのです。そういう意味で、子どもを叱る対象、指導する対象だと捉えていくと、子どもの SOS はなかなか見えないです。子ども観を問いかけることとあわせて、子どもの声が聞こえるという問題が、私はあるかなと思っています。

それから、この間、生活指導の研修会に行ったら、「幼いですね、今の子どもは。6 年ですよ。はなまるつけてっていいます」と発言される先生もいらっしゃったのですけど、これは、子どもはこうあるべきだ、こうすべきなのに今の子どもは違うという見方です。そういう先生は不足や不満ばかり見える。そういう見方をすると、子どもの声が聞き取れないかなど私は思っています。

また、毎日、忙しい、イライラオーラ出して、上から目線で子どもを見る大人には子どもは近づいてこない。親と子どもの関係でもそうでしょう。親が忙しいオーラ、イライラオーラを出していると子どもは来ませんよね。そうならないためにも、私を学ぶことで自分の中へ優しさを刻むのだっていつも思っています。

共感するということ。「塾やめたい」、「あんたが行く言うたんやろ」。「学校、休みたい」「それくらいのこと」。と SOS を出しても、「そうか」と共感することができにくく、大人のところに心は開かないです。大人もそうです。昨日、娘に赤ちゃんが生まれて 1 ヶ

月帰ってきてている。1ヶ月の赤ちゃんと暮らしていくおばあちゃんも大変やってとある方に話しました。そしたら、その方が「自分の子どもやろ」と言います。その前に「大変やな、1ヶ月もおったら赤ちゃんも泣くしなあ」と一言、言ってくれたらいいのに、「自分の子どもやろう」って言われたらもう話が続かないですよね。共感するということがとても大事。そうしないと子どもは見えてこない。

それから、よくお母さんに質問されます。「子どもの話を聞いてあげようと思うけど、うちの子全然しゃべりません。どうしたらいいですか」って。「今日、何があったん?」と聞き出そうとする。聞き出そうとすると、どんどん子どもは心を閉じます。「じゃあ、子どもは言わない、大人は聞き出したらあかんと言うたら、どうするのですか先生」ってよく聞かれるのですけど。いやいや、おかあちゃんが話したらいい。「おかあちゃん、今日なこんなことあって」と大人が自分を語る。私は別に大学でいい仕事をしているわけではないんですけど、なぜかうちの学生はほんまのことをいっぱい書いてきたり、話してくれたりするのです。いろんな先生がああだ、こうだと言ってくれるのですが、私は素の自分で学生の前にいるのです。「先生はこんなことあって」とか、「今日ものすごく、ショックやったわ、聞いて」とか、私もまた自分を語ります。そうすると学生も「僕もなあ」って心を開いてくれるのですね。大人もまた、自分の心を開いて自分を語ることで、子どもは本当の姿を見てくれるのだなと思っています。

もう一つ大事なことは、大人が自分自身の子ども時代と重ねて考えてみることです。たとえば、さっき学生が人の目が気になって本当の自分がなかなか出せなくて、どれが本当の自分かわからないっていうのを書いていましたね。皆さんもないですか。私はそんな時期もありましたし、今も全くないわけじゃない。素直に謝れない自分がいるっていうところ、私もありますよ。子どもたちや学生たちが、語りかけてくれることを聞いて、「私もあるわ」って子どもを理解することと、教師があるいは親が、自分自身をもう1回振り返って自己理解することと重ね合わせたところで、子どもの理解が深まるかなとすごく思っています。

また、複数の大人たちで子どもを理解する、謎解きをするということがすごく大事ですね。学校でいい子をして、家でいい子をして、学童で暴れまくる。三者が集まるとよく見えます。初め親は「学童の先生の指導が悪いんや」とか言いますけど、実は学童保育で暴れながら子どもがSOSを出している姿がよく見える。三者が集まって、そうか、そういうわけで、この子はこんなふうにしているのだなっていう謎が解けるのですね。あるいはご夫婦で見ることもある。それからもちろん教師、教師同士で子どもを見ることで、先生との関係が豊かになるってことがすごく大事だなって思っています。いずれにしても、1人の先生が見えないことを隣の先生と話をして、「ああそうやわ、兄ちゃんもそんなとこあった」とか、「わかったわ、こないだこんなことしてたよ」っていうふうに語り合うことで、大人の複数の目で子どもの理解が深まるという、この視点もとても大事だと思います。

そして最後に、作文教育を私は大変大事にしてきました。子どもを知るためにとか、学級集団を運営するためにしているわけではないのです。人間が自分の言葉で自己表現すると

いう深い欲求の中で、自分で自分の言葉を綴りながら人間になっていくという、私は自律と学力の大きな決め手を握っていると思っていて、その作文教育を通して結果として、学級集団が繋がっていったり、私もまた作文を読むことで、子どもを発見してきました。書いてくれたからこそ見えることがすごくあるのですね。

3年生の子が8ヶ月の弟の面倒見て、「10時になってもお母ちゃんが帰ってこんで、そしてミルクの作り方がわからへんから、ずっと泣くから1時間抱っこして、やっと寝て、先生、しんどかったよ」という日記を書いていきます。そうなんや、まあちゃんはこんな暮らしをしてるんやなっていうこと知るのですね。そんなふうに作文教育をくぐりながら、子どもを深く理解するという、そんなことも勉強もさせてもらってきたかなというふうに思うのです。

子どもの表現というのは、生きている証だというふうに思っているので、長いとか短いとか、上手とか下手とか言わないで、そっくり受け止めながら、クラスのみんなでそれを共有して読み合うという日々をずっとやり続けているのです。

今年8月6日から8日まで、大阪で作文教育の全国大会を開催しますが、もう一回、「はじめに子どもありき」から出発する教育をみんなの輪の中で大きくしたいと思って取り組んでいます。

<杉本厚夫（所長・京都教育大学／関西大学名誉教授）のコメント>

あるコミュニティ・スクール（CS）の研修会で、フロアーから「なんで、学校運営協議会のメンバーに子どもが入っていないのですか？」という質問がありました。講師の先生は、「子どもは未熟だからです」と答えました。

思わず「いやいや、未熟だからこそ、必要なんでしょう！」と心の中で叫びました。

未熟とは、経験が少ないということですね。われわれは、経験を積んでいますが、逆にそのことが足かせになって、新たな価値を生むことができないのです。つまり、未熟だからこそ、われわれの経験を打ち破る発想を提示することができるのです。

ちなみに、OECDの教育プロジェクトには、必ず、子どもが入っています。

先日もCS関連の会議で、子どもたちの課題とその解決について熟議をしてもらったのですが、その時に、「われわれの頃はこうだった」と自分の経験をもとに、課題を捉え、解決しようとする人がいます。そうなると、自分の人生（価値）を子どもたちに押しつけることになるのです。それは、子どもたちの未来を奪ってしまう危険性があります。つまり、目の前の子どもを見失ってしまい、子どもを理解することはできないのです。

ワロンという発達心理学の研究者は、われわれは社会性を持って生まれてくるが、それを教育が壊してしまっていると言います。それは自分たちの経験した社会性（例えば、忖度して言いたいことを言わないとか、長い物には巻かれろとか、出る杭は打たれるとか）を押し付けるからです。

「子どもが夕飯の30分前に『お腹が空いた』とやってきました。その時あなたなら何と

応えますか?」と保護者や先生に聞くと「もう少しだから我慢しなさい」とか「これでも食べなさい」というようです。

子どもは「お腹空いた」と自分の状態を伝えただけなのに、そのことは受け止めてもらえないで(聴いてもらえないで)、すぐに指示されます。

そこには、子どもを管理するという発想があり、未だに保護者や先生を縛っています。これは、指示を出したり、命令したりして、権力で子どもを管理するという近代教育が始まって以来、綿々と続けられてきたことです。

「そうお腹が空いたの」と子どもの思いを聞いて、共感していないですね。子どもの思いを受け止めてやると、「あと30分だ。遊んでこよう」と、自分で状況を判断して、意思決定していきます。

未来に生きる子どもたちにとって必要なのは、この意思決定の力ではないでしょうか。コロナ禍で、ワクチン接種をするかどうか、個々人の意思決定に委ねられていましたよね。意思決定の自由が担保されていて初めて、子どもたちは自分で考えることができるのではないかでしょうか。

その意味では、子どもに任せてみるということが、今の教育には必要だと思います。そこで、意見を求められれば、応えるという姿勢が、子どもに寄り添うということではないでしょうか。それは、「指導」から「支援」という学習者としての子どもを主役とする、これから教育の在り方なのではないでしょうか。

子ども未来・スポーツ社会文化研究所季刊誌第5号（2022年春号）

発行日 2022年4月30日

編集・発行者：子ども未来・スポーツ社会文化研究所（代表理事 杉本厚夫）

編集委員：杉本厚夫、西山哲郎、速水 徹、谷口輝世子、三角さやか、尾島 祥

一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所

Research Institute for the Future of Children and Sport Social Culture

<https://fcssc2020.jp> E-mail:info@fcssc2020.jp

